



## 大図研京都ワンディセミナー

OPACによる電子リソース検索と  
オープンアクセスコンテンツの活用

を開催しました。

去る2008年12月7日(日)京都市国際交流会館にて、大図研京都ワンディセミナー『OPACによる電子リソース検索オープンアクセスコンテンツの活用』を開催しました。会員・非会員問わず、たくさんの方にご参加いただきました。今回はその参加報告をお届けします。また、大図研京都支部のウェブサイトにも参加者からいただいたご意見を掲載しております。

講師：伊藤民雄氏（実践女子大学図書館）

日時：2008年12月7日（日）14:00～16:40（13:45～受付開始）

場所：京都市国際交流会館 第2会議室

主催：大学図書館問題研究会 京都支部

参加費：大図研会員は無料 / 非会員は500円

参加者：35名（うち非会員17名）

概要：大学図書館では近年、電子ブックや電子ジャーナルといった、電子リソースの購入と提供が進んでいる。ただし、その提供方法においては、紙媒体はOPAC、電子媒体はリストといった利便性の低い状況が続いてきた。しかし、2007年4月、実践女子大学図書館ではOPACによる電子リソース検索の提供が開始され、OPACから紙媒体も電子媒体も、分け隔てなく探すことができるようになった。また、2008年7月には日本語オープンアクセス誌データベースとそのリンクリゾルバが公開され、日本語オープンアクセス誌へのリンクリゾルバが可能となった。今回のワンディセミナーでは、実践女子大学図書館の事例を元に「所蔵からアクセスへ」の本質について、考えました。

## 【目次】

大図研京都ワンディセミナー開催報告	...	1
大図研京都ワンディセミナー 「OPACによる電子リソース検索とオープンアクセスコンテンツの活用」参加報告		
電子リソースの時代に大学図書館がやるべきことは？	筑木 一郎	...
電子リソースの活用を考えるーワンディセミナーに参加して	村井 正子	...
実践女子大学・短期大学図書館の事例とDOAJJについて	寺升 夕希	...
本の紹介 第6回 『和本入門：千年生きる書物の世界』	赤澤 久弥	...

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール：[dtkk@rg7.so-net.ne.jp](mailto:dtkk@rg7.so-net.ne.jp)（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

## 大図研京都ワンディセミナー

## 「OPACによる電子リソース検索とオープンアクセスコンテンツの活用」参加報告

## 電子リソースの時代に大学図書館がやるべきことは？

筑木 一郎

2008年7月、図書館界に衝撃が走った。DOAJ (Directory of Open Access Journals in Japan) が公開されたのだ。間違いなく2008年度の図書館界トップニュースの1つといえるだろう。

そのDOAJを作成された実践女子大学図書館の伊藤民雄さんが京都に来られるという。これはお話を聞きにいかなければ。ということで、大学図書館問題研究会京都支部ワンディセミナー「OPACによる電子リソース検索とオープンアクセスコンテンツの活用」(2008/12/07、京都市国際交流会館)に参加した。

伊藤民雄さんといえば、レファレンスブック『インターネットで文献探索』で著名な方だが、伊藤さんがお勤めの実践女子大学図書館は、近年、電子リソースの検索環境の改善を積極的に図っている。2007年には、OPACから電子ジャーナル、電子ブック、そして青空文庫などのオープンアクセスコンテンツを検索できるようにしている。2008年には、前述したDOAJを作成し広く公開した。今回のセミナーでは、この2点を中心に解説をいただいた。

きっかけは、システムリプレイスであったという。10年以上使ってきた図書館システムに限界を覚えつつ、なかなかリプレイス予算は認められない。そのような状況を打破するため、まずは教員アンケートを実施した。そこで明らかになったことは、図書館の認知度は高いにも関わらず図書館サービスはあまり利用されていない。よく利用されているのはOPAC。そうであれば、OPACを中心としたサービス展開を構築すればいいのではないか。印刷資料だけでなく電子資料もOPACで検索できるように、利用の多い教員指定図書・推薦図書もOPACで検索できるように、OPACから文献複写取寄などに連携するように、など多くのアイデアがOPACに盛り込まれることとなった。

中でも、注目すべきはやはり電子リソースのOPAC登録であろう。契約している電子ジャーナル、電子ブック、また、契約している電子ジャーナルAtoZリストのナレッジベースで管理しているオープンアクセス誌をまず登録した。これだけでも十分に素晴らしい取り組みだと思うが、ここで満足せず、伊藤さんは、次の取り組みを考える。日本語コンテンツの登録が不可欠だということ。しかし、日本語コンテンツの契約型電子ブックは当時なかった、そしてAtoZリストにはフリーの日本語ジャーナルは収録されていなかった。この状況を伊藤さんは、自分でデータを作るということによって打開する。

青空文庫や日本ペンクラブ電子文藝館、近代デジタルライブラリ、Project Gutenberg など約7万タイトルの電子ブックをリスト化し、OPACに登録した。また、オンライン書店等で一部分立ち読み可能な電子ブックも、購入希望へ繋げる可能性をみて登録しているという。これは面白い試みだ。一方、電子ジャーナルは、CiNii、J-Stageだけでなく、WARPや各大学のリポジトリ、AGROLib、政府機関・自治体・学会などのホームページを網羅的にあたり、国内オープンアクセス誌1万タイトル以上を採録、OPACに登録している。OPACで検索した時に冊子体・電子ジャーナルの書誌がヒットしなければ、即ILLと判断できるまで登録してみた、とおっしゃっていたが、1万や7万というのはそれほどまでに徹底的な数字だ。

作業量はものすごいが、しかし、方法はシンプルである。もうひとつ、指摘したいのは、このシンプルさである。特別な技術が必要なわけではない。特に専門的な知識が必要なわけでもない。データを切り出してくる法則性を導き出し、Excelなどに記録していく。あとは積み重ねたデータを投入するだけだ。このシンプルさは、特別な技術力のない私たち誰もが、こういったことがその気になればできるのだということを教えてくれる。私たちは技術に驚きを感じることもあるが、いいサービスの本質はその奥に隠されたシンプルなアイデアなのだ。

シンプルさといえば、OPAC にすべての情報を集めるということが究極にシンプルさを表している。ユーザに、ある時は OPAC、ある時はリスト、ある時はデータベースと、いくつもの検索インターフェースを使い分けさせるというのは限界がある。というより、サービスの提供者として考え直す時期が来ているのかもしれない。OPAC に紙の本の情報だけでなく電子リソースの情報も集めるという戦略、図書館が提供するサービスの窓口を OPAC に統一する戦略、それはおそらく正しい。最近、海外で開発が進み、日本でも機運の高まりつつある次世代 OPAC の本質とは、つまりそういうことだ。

DOAJ は、OPAC 登録用に整備した OA 誌リストを基にして構想された。これまで、必要性は認識されながら、その想像のつかない作業量に誰もが尻込みして諦めていた、日本（語）のオープンアクセス・ジャーナルのダイレクトリ（リスト）、それが DOAJ だ。そこには、量としての努力だけでなく、先を見通す力、先見性の確かさも見て取れる。

ヨーロッパには DOAJ (Directory of Open Access Journals) があり、ユネスコも発展途上国向けに Open Science Directory を作成している。しかし、そこには日本（語）のジャーナルは含まれていない。であれば、OPAC 登録用に作ったデータの再利用として公開する意義は十分にある。また、NII が次期 NACSIS-CAT として構想する電子情報資源データバンクも、実際に動くとしても数年後の話だ。そこに DOAJ の成功の可能性をみたという。そこからの行動ははやい。たった3ヶ月の間にプロトタイプを作成し、公開に漕ぎ着けている。そのスピード感も素晴らしい。

DOAJ の課題は、そのメンテナンスだ。質疑応答でも話題となり、ご自身でもおっしゃっているが、1 万タイトル以上ものデータのメンテナンスは容易ではない。日本の場合、大手のプラットフォームは CiNii と J-Stage のみであり、後は各大学のリポジトリや、研究機関・政府機関・自治体のホームページ上と、ジャーナルサイトが散在している。メンテナンスするには、それらを定点観測していかなければならない。しかも、今現在、日本では EJ 化のまっただ中にある。急増する EJ タイトル、電子化の範囲の変化、動きは速い。

現在は、ほぼお 1 人でメンテナンスしているとのことだが、1 人では限界があるだろう。DOAJ が世界に通用するツールであり、日本中の各機関の OA 誌を収録していることを思えば、日本の各機関の協力が必要になるだろう。それは、NACSIS-CAT のような大学のネットワーク形態によるメンテナンスであったり、国立情報学研究所 (NII) や国立国会図書館 (NDL) といった中核的なセンター形態によるメンテナンスであったりするかもしれない。どのような形態にせよ、DOAJ を日本の情報資産として維持していく体制を作ることが求められている。

一方で、外国産 AtoZ リストベンダーとの協力関係はすでに築きつつあるとのことだ。これは非常に重要なことだ。各 AtoZ リストのグローバル・ナレッジベースに収録されるということは、世界中の AtoZ リスト契約機関が利用できることを意味する。何より、電子ジャーナルの情報はすでにくつつかのベンダーのグローバル・ナレッジベースに集約さ

れつつある。ここで日本の OA 誌が収録されないことは世界に遅れをとることを意味するだろう。その意味でも、伊藤さんがすでにベンダー各社と話をしているという事実はとても重要なことなのだ。

もう1つの課題は、メタデータの標準化だ。DOAJはリンクリゾルバとしても機能する。CiNii や医中誌 Web などの文献データベースに仕掛けることによって、OA 誌へのリンクングを実現する。通常ジャーナル単位のリンクングには ISSN を用いるが、日本の OA 誌は ISSN を持たないものが多い。識別子がないとタイトルなどの文字列などでマッチングするより仕方なくなる。タイトルなどには揺れがありうまくリンクングできないことが多い。特に DOAJ のウリはそういった ISSN のない不定型のジャーナルを数多く収録していることであり、それらへのアクセスを提供することである。そこで、伊藤さんは、ISSN に代わる識別子として NCID や JST 資料番号を使うことを提案している。うまく OpenURL で受け渡すことができればこれも1つの有効な手法だろう。

伊藤さんは最後に、一つの可能性から複数の可能性を連鎖的に追求していく、そんなサービスを心がけていきたい、とおっしゃっていたが、それはまさに伊藤さんが取り組んでこられた道のりそのものといえる。OPAC をユーザーサービスの中心に、というシンプルなアイデアが、電子リソースの OPAC 登録へつながり、それがフリーの電子リソース・リスト作成につながり、そして DOAJ の構築・公開へと結びついている。そして今や、DOAJ を核として、NDL、NII、JST、そして大学図書館界を巻き込んで、和製 Ulrich's Periodical Directory 構築を提案するところまで構想は広がっているという。サービス展開の夢は大きい。

お話を聞きながら、まだまだ図書館が開拓すべきサービスはあるのだ、と再認識した。電子リソース関連だと、私たちはやるべきことはもうないのかも、とつい考えてしまう。しかし、図書館が手がけるべきことは多い。ただ、取り組まれていないだけなのだ。私たちの眼前には未来の領域が広がっている。

つづき いちろう (京都大学附属図書館)

---

## 大図研京都ワンディセミナー

「OPAC による電子リソース検索とオープンアクセスコンテンツの活用」参加報告

### 電子リソースの活用を考える—ワンディセミナーに参加して

村井 正子

---

近年、学術情報流通はインターネットを基盤として広がっている。学術雑誌の多くは電子ジャーナルとなり、機関リポジトリによるオープンアクセスの実現も浸透してきた。このようなデジタル資源の増加に伴い、電子リソースが情報サービス(学術情報流通)にとって必要不可欠となる大学図書館において、OPAC からのオープンアクセスコンテンツ検索・アクセスを実現し、Web から無料で使える日本語学術雑誌のダイレクトリ“Directory of Open Access Journal in Japan 0.1”を公開された実践女子大学図書館の取組みを紹介いただいた。

最初の演題「OPAC による電子リソース検索とオープンアクセスコンテンツの活用」は、

図書館システムリプレイスに際して、教員アンケート結果を反映した、OPAC を中心に据え各種遠隔サービスの連携を実施するシステム導入（「電子リソースへも対応」「教員指定・推薦図書検索」「横断検索システム」）の事例をご報告いただいた。

OPAC で全資料検索ができることにより、利用者は紙媒体・電子媒体を意識しなくても欲しい情報を探せ、無駄な ILL（不明・不要な ILL）の軽減も可能となった。このような利用者サービスの拡大・サービスの質の向上を目的とする取り組みは、他大学図書館・機関においても大いに参考になり活用が可能だと思う。

もう一つの演題「日本語オープンアクセス誌データベース（DOAJJ の構築と提供）」については、個人的に興味を抱きながら「About DOAJJ ページ」以上の情報は持ち合わせておらず、私自身の勉強不足により（システム的な仕組みの話もあり）最初「難しい内容」と感じた。しかし“DOAJJ”を実際に少し覗いてみたところ、FAQ に掲載されている様々なケースに遭遇するなど（CiNii の場合 無料公開の全てのものへリンクしているわけではない、雑誌タイトル下の全ての巻号が無料のものにしか直接アクセスできない…、等々）図書館現場の業務に携わらない者にでも、利用者として簡単に扱えたことが驚きだった。

NII 次世代目録構想が実現するまでの間の暫定的な公開というスタンス、検索システムとしての課題もあえて放置しているところも含め、大変に面白く意義深いことだと思った。

「OPAC による電子リソース検索」を可能にし、“DOAJJ”を企画・作成された伊藤氏ご本人から直接話を伺える機会ということで、セミナー会場はほぼ満席の状態だった。大量の作業を伊藤氏ひとりで行っておられることや、ご自身がレファレンスカウンターにいた時の目線で収録や機能を選択されているなど、現場に即した様々な質問・意見に対する回答も興味深く伺った。

私自身の仕事には直結しないが、図書館現場のスタッフへセミナー内容を展開したところ感謝され、早速自分で情報を集め活用している様子を見て嬉しく感じた。「所蔵からアクセスへ」の本質を考えた時、図書館にある様々な情報・資料を死蔵させずに、共有し活かし連携していくことが大事であると改めて思った。

むらい まさこ

---

## 大図研京都ワンディセミナー

「OPAC による電子リソース検索とオープンアクセスコンテンツの活用」参加報告

### 実践女子大学・短期大学図書館の事例と DOAJJ について

寺升 夕希

---

2008 年 12 月 7 日（日）に大図研京都ワンディセミナー「OPAC による電子リソース検索とオープンアクセスコンテンツの活用」が開催されました。私自身、ILL 業務を担当していることもあって、オープンアクセスコンテンツには普段からお世話になっています。しかし、講演者の伊藤民雄さん（「先生」と呼ばないでください、と話されていたのであえて「さん付け」で表記します。）が主体となって運営されている日本語オープンアクセス誌データベース Directory of Open Access Journals in Japan（以下 DOAJJ）については、恥ずかしながらその名前を聞いたことがある程度でした。今回の講演では、実践女子大学での試みと DOAJJ の構築を柱に、電子リソースへのアクセスとその活用についてうかがうことが

できました。

### 1. 実践女子大学・短大図書館におけるシステムリプレイス

まず最初に、実践女子大学・短期大学についての簡単な紹介があり、つづけて図書館概要の説明がありました。蔵書数や前図書館システムの状況からシステムリプレイスに至った経緯などです。実践女子大学・短期大学図書館では2007年のシステムリプレイスに先駆けて教員にアンケートを実施されました。その目的は、教員構成とその学術情報の利用実態を把握し、問題点を整理した上で今後の図書館サービスへ活かすことにあります。その結果、教員構成の傾向として40代・50代のベテラン教員が多く、研究盛んな30代の教員が少ないことが挙げられました。また、学術雑誌・電子ジャーナルを主に利用する（であろう）理系の教員が少ないことも特徴のひとつのようです。利用実態として明らかになったのは、図書館サービスの中でOPACの認知度が高く比較的よく利用されているということでした。そこでOPACを中心としたシステムリプレイスが提案され、その他遠隔サービスとの連携も導入機能として確認されました。

### 2. OPACの諸機能と電子リソース検索

ここでは実際に実践女子大学・短期大学図書館のOPACが紹介され、電子ブック検索機能や全文へのリンクなどを拝見しました。画面上で文学作品が読めることも素晴らしいのですが、個人的に利用者にとって親切な機能だなあと感じたのは以下の点です。ひとつは、アクセスフリーとなっている資料がOPAC検索結果画面で「学外からもアクセス可」と表示されている点、もうひとつはOPAC検索でヒット0件となった場合にも利用者が次のステップへ進みやすいよう外部リンクが用意されていることでした。伊藤さんの「0件で終わらせると味気ないから」という言葉に人柄を感じた気がします。

電子リソース検索については、導入理由・メリット・具体的な登録方法・問題点が話されました。導入の一番の理由は、増加・多様化の一途をたどる電子リソースに対応するため検索先を一元化・集約化することです。そのメリットとして、1度の検索で所蔵とアクセス有無を表示できること、電子リソースを自館蔵書のように提供できること、利用者が気づいていない電子リソースの存在を知らせることなどがありました。さらに具体的な登録方法を聞いたときは本当に驚きました。MARCのような構築されたデータを取り込んだわけではなく、登録のためにデータを作成されたとうかがったからです。作成データの詳細は割愛しますが、MARCに制限されないため柔軟にどんなWebページにも接続できるということでした。実際に登録されてみると、利用者は説明がなくても電子リソースにたどりつけたそうです。ただ、電子リソースの利用が飛躍的に増えたかということと案外そうでもなかった、と少し寂しい話もありました。しかし図書館員にとって非常に有用であることに違いはありません。実践女子大学・短期大学図書館の職員からは歓迎の声が多数で、さらなる精度を求められたそうです。一方で「日本語コンテンツの不足」という問題点にも気づかれました。ここで、日本語コンテンツの全貌が把握されていないのではないかとこの考えに至り、作るしかない、と自分たちでフリーコンテンツを調べて登録するという想像もつかない作業が実施されました。後に述べるDOAJJの構築にはこういった背景があったようです。

### 3. DOAJJ

ここからはDOAJJに話を移し、企画段階から機能・内容までが発表されました。2008年7月に実践女子大学・短期大学図書館では、オープンアクセスとなっている日本語学術雑誌のデータベースDOAJJを公開されています。きっかけとして図書館での「不要ILL」の発生にも言及されましたが、先に述べたような「日本語コンテンツの不足」を補うべく、日本語電子リソースデータベースの企画がなされました。CiNiiやJ-STAGEといった既知のものから大学のリポジトリ・公的機関・学会・企業が公開している雑誌まで約1万誌が

含まれています。調査方法として2通りのパターンが紹介されました。2次情報データベース収録誌(傾向)から探す方法と各機関のリンクリストからサイトにアクセスし網羅的に刊行物を探すローラー作戦です。簡単に表現されていますが多大な時間と労力を注がれたことと思います。DOAJの今後の課題としては、雑誌名旧字対応の早急な解決や確実に電子ジャーナルに繋ぐべく論文単位へリンクすること、メンテナンスの諸問題などが列挙されました。最後に将来展望として、さらなる機能充実と他機関との連携について触れられ、講演は終了しました。

てらます ゆうき (滋賀医科大学附属図書館)

## 本の紹介 第6回

### 『和本入門：千年生きる書物の世界』

赤澤 久弥

「目録を取りたいけど専門的な知識がないし」、でも「やっぱり古いものだし大事にしないと」。そんなこんなで、和本が書庫に眠っている図書館は、少なくないのではないのでしょうか。かくいう私の勤務する図書館も同様なのですが……。それはさておき、まずは和本のことを知ろうと、図書館学の教科書を手にとっても、通り一遍のことしか書いていない、かといって、書誌学の本は、なんだかとつきにくい。そんなとき、「本の文化が形成される歴史的背景を探りながら、実際に和本を手にとるように、できるだけ実例で説明することに努めた」(まえがき)という本書は、和本の世界へ導いてくれる格好のガイドブックとしてお奨めです。

まず「第一章 和本とはなにか」では、版型によって、「物之本」(教養書)や「草紙」(娯楽書)などのジャンルがおおよそ分かること、その伝統は現在の出版に受け継がれていることなど、今に続く和本の歴史や様式が語られます。

続く「第二章 実習・和本の基礎知識」では、「どれがほんとうの書名か」「本名が出てこない著者欄」「巻数、冊数の調べかた」といった章題からもお察しいただけるように、初めて和本の目録を取ろうとしたときに頭を悩ませるあたりも、見るべきポイントを示しながら、分かりやすく解説されます。

木版印刷の板本は長持ちしたため、版元間で売買されながら「百年はあたりまえ、なかには二百年以上経って増刷することもよくあった」(まえがき)。「第三章 和本はどのように刊行されたか」は、そんな江戸期の出版の様相とともに、「刊記・奥付の見かた」など、本の素性を明らかにする方法を教えてください。とくに江戸の名所案内本『江戸砂子』を例に、刊記や版元広告などから板木の行方を跡付ける過程は、ちょっとスリリングです。

最後の「第四章 和本の入手と保存」は、古書店やネットなどで和本を入手する方法とともに、和本の保存方法や虫害対策などを取り上げます。たいていの和本はコピー機にかけても問題ないこと、電子レンジでチンして虫を殺す方法など、目からうろこでした(もつとも後者は、「奥さんに見つからないようにしないと、二度と電子レンジを使わせてもらえなくなる」とのことですが)。

この本の著者、橋口侯之助さんは、神田の和本専門古書店主。単なる「コレクション」ではなく、また研究対象としての「もの」でもない、現役で流通している「生きた本」として、日々和本を扱う著者の立ち位置が、本書の分かりやすさに加えて、親しみやすさを

も醸しているように思えます。さて、橋口さんは、千年を生き得る和本の最大の敵として「無知」ゆえの廃棄をあげ、そうしたことを防ぐ手立てについて、次のように述べます。

その第一歩は、敬して遠ざけるのでなく、身近で親しめる対象として和本を見ることである。とかく図書館などでは和本を「貴重本」として特別扱いするので、容易に閲覧できないことが多い。(中略) そのため和本を正しく扱う方法などを学ぶ場がなく、いつまで経っても和本と親しむ関係が育たない。ほんとうに文化財として大事に保管すべき本と、自由に閲覧してもよい本の区分けをしっかりとすれば解決できることなので、一考をお願いしたい。(p.232)

十年一昔で変わる電子的なサービスを提供しながら、百年、千年を越えてきた知を次に伝える。図書館のすべきことは多そうです。ともあれ、まずは本書を一読してから、書庫の和本を開いてみると、和本もこれまでとは違った顔を見せてくれるはずです。

本書の続編として、江戸の出版文化をより深く掘り下げた『続和本入門：江戸の本屋と本づくり』が刊行されています。併せてお奨めします。

橋口侯之介『千年生きる書物の世界』(和本入門; [正]), 平凡社, 2005.10  
同 『江戸の本屋と本づくり』(和本入門; 続), 平凡社, 2007.10

あかざわ ひさや (奈良教育大学学術情報研究センター図書館)

2004年を最後に途切れていました連載企画「本の紹介」が復活しました！このコーナーで紹介したい本、とりあげて欲しい本がございましたら、ぜひご投稿、あるいはお知らせください。

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2008年度(大図研会計年度2008.07-2009.06)に入っておりますので、2008年度の会費の納入をお願い致します。また、2007年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000(大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000)です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 (dtkk@rg7.so-net.ne.jp)、または支部委員(組織・財政担当)の渡邊伸彦(〒606-8317京都市左京区吉田本町 京都大学附属図書館資料管理掛気付 渡邊宛 電話:075-753-2647)まで。